

すべてのシーンが、愛でつながる。

四條畷学園中学校と心通い合う
三姉妹と弟、そして母

「二人一人が、ずっと
学園の『家族』なんだね。」
色鮮やかに、物語を未来へ。



なわ 畷 ドラ

四條畷学園100年目のストーリー

VOL.2

〈優しさのバトン〉
絆を彩る、楽しさ、
強さ、温かさ。

お話の第一想者は、
社会人一年生の「私」！

「憧れ。それは、幼い頃、病気がちだった私を助けてくれる存在だった看護師さん。三姉妹と弟、その長女として、母がいつも投げ掛けてくれた言葉は、今の自分より少しでも上を見て頑張ろうね。そう、私の進む道は道はできると、思ってたわけでもないけれど、結果的には結構いい道作ったのかも。妹たちも弟もみんな学園中学校だもの。だってこの学園はね、それぞれの個性に寛容だし、先生方のバックアップは手厚いし。そりゃノビシロあれば、ぐんぐん伸びるよ。やってみよう、チャレンジしてみようって気持ちにさせてくれる。だからこそ、一人じや届かないかもしれないところに手が届く、思いが至る。だからこそ、現在の立ち位置まで辿り着けた。と感じてる。そこには今年から、希望の病院で看護師としてのキャリアをスタートさせる自分が居る。成せば成る、私・愛梨の法則をしつかり育ててくれたのは、学園中学校に通った三年間。あんまり語り過ぎるのも何だから、次、愛実、頑張れ！」

第二想者は、決めるところは決める、
次女の「私」！

「ちょっと気紛れ？実は天然、マイペース派、とよく言われる。割と一人で読書したりも好きだけれど、ちゃんとチームプレーにも順応できちゃう私。三姉妹はみな学園中学校のバスケットボール部。この学園のバスケット部には「山ラン」という練習が有って、勾配に富む近くの山道を懸命に走る。黙々と走る。名物練習法で、一つの事に集中するのは私的に意外と楽しかったり。なのでいつも先頭集団の組。試合では準レギュラーぐらいの存在、でも選手交代でコートに立てば、勝負所でシュートを決めてチームの勝利にパッチリ貢献。そんな部活ライフが好ましいものだったのと、何より特記に値するのはクラブ顧問の先生の面倒見のよさ。そこところは三姉妹ともに深く深く、母も含めてさらに深く、有難さと身近さをもって実感しているわけで。家族のように温かく、卒業した今でもコミュニケーション継続中。きつと妹や弟が学園中学校へ好感を抱く素敵な引力になったはず。W田先生、ほんとにほんとに有難う！
ここらで彩愛にバトンです、しつかりね。」

第三想者は、お姉さんと母の影響大、
三女の「私」！

「思い入れ。まずは学園の礼儀正しさに。お姉さんたちを近くで見ている私が、いい感じ、って心を動かされたのがその光景。すれ違いざま立ち止まって、誰にでも当然のように挨拶。『おはようございます』『こんにちは』。さりげないことなんだけど、なかなかできない、でもすごく大切なこと。挨拶を大切にしている人って、何故かシュツとしてカッコよく見える。愛梨お姉さん言うところの、筋が通ってるかどうか。やはり人と人の間には、外してはいけない筋道というものがある。尊敬の念とか、親愛の気持ちとか。愛実お姉さんは言葉には出さないけれど、細やかな気遣いが折に触れて伝わってくる存在。家は親子みんなととても仲がよいけれど、そういう関係のすぐ先に、私たちと学園中学校との関係もある感じ。それは時に物語、といったカタチの筋だったりもする。学園って、ある意味大きな家族の物語。いつ訪れても包み込んでくれる、この場所にしかない魅力に、私は、思い入れ、続けている。自分自身の物語で言うところ、長女のお姉さんが歩んでいる筋道を、私も追いかけている。学園という家族が、うちの家族が、母が、応援してくれるその道、看護師をめざして。あとのお話はお母さんに託そう。じゃあお願いね。」

想いのアンカーは、親の「私」。
三姉妹の名前に、
それぞれ「愛」を一字ずつ。

「愛ある時の訪れ。ひと時ひと時が、母である私にとっての満ち足りた出会いの積み重ねです。たくさんさんの「特別」が、この場所に、この学園にちりばめられている気がします。それはさらに光る、家族にとっての心の宝物。そして、娘たちと息子を、ひとえに安心して託せる環境への想い。私は、我が子が学園に通っていないブランドの期間も同校のアシスト係として協力していた経験があります。よく子供たちからは「お母さんは私たちの家族であると共に、学園中学校の母でもあるんだよね」と言われます。ここにはゆたかな優しさの歴史に醸成された空気が漂っていて、先生に依頼されなくとも、何かお手伝いしたいなあ、と感じてしまう。偶然ですが、一つ、学園と私たち家族は象徴的な「愛」で結ばれています。長女の名は「愛梨」、次女は「愛実」、三女は「彩愛」。ドラマのような成り行きを予想して付けたわけでも何でもないのですが、すごくシチュエーションにぴったりと来る、絶妙な絆のあらわれ。もちろんこの春から四入目として学園に通う弟にも心の愛が宿っています。私と、一人一人の子供たちと学園中学校、みんなが故郷への想いを紡ぐように、これからも次の一歩への拠り所として、また自分たちの今を形作る原風景のある場所として、いろんな「愛」でつながっていったらいいですね。」

学ぶ喜びをずっと。
100TH
SHIJONAWATE
GAKUEN Since1926

